

### <祈りのすすめ>

「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデが死ぬまでそこにいた。」  
マタイによる福音書2：14-15a（新共同訳）

イエス・キリストがこの世界に来られたことは、闇の中に光が輝く出来事でした。闇は光に勝つことが出来ません。しかしながら、闇が光の前に黙って引き下がるとは考えられません。闇は光の出現に当たって巧妙かつ必死の抵抗をするのです。

クリスマス物語に出て来るヘロデ王の残虐ぶりは有名です。しかしこの人は恐怖政治だけで国を動かしていたわけではありません。王は国民から税金を厳しく取り立てながら、一方で人々の心をつかむためのさまざまな政策も実行しており、そのための手腕も持っていました。特にエルサレムの住民には、経済的繁栄という甘い汁を吸わせていたということです。壮麗な神殿もヘロデ王が建設したのです。

エルサレムの人々にとっては当面の暮らし向きが良いことが第一でした。その願いさえかなうなら王が暴君であってもがまんしたようです。東の国の学者たちからメシア誕生の知らせを聞いた時、人々は不安に思いました。王がまた血なまぐさい事件を起こすかもしれないと思ったのです。しかし人々はそれ以上何もしませんでした。自分たちの安定した生活を危険にさらしてまでメシアを拝みにゆく必要は感じなかったのです。

このように、暴君のもと大多数の人たちがまるで家畜のように飼育慣らされてしまった社会の中で犠牲になったのが最も弱い立場にいる者たちです。王はベツレヘム周辺にいた2歳以下の男の子を一人残らず殺させました。しかしエルサレムの人々はこの事件を聞いても、ああうちの子でなくて良かったぐらいにしか思わなかったのではないのでしょうか。

神はこの惨劇に先立って天使をヨセフの夢に現れさせ、エジプトに逃げるよう促しました。「ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへと去り、…」と書いてありますから、

### <祈り>

いま困難の中にある外国の人々と共におられるイエス・キリストから発せられる光を見出すことが出来ますように。  
(靖国神社問題特別委員会委員・広島長束教会牧師 井上 豊)

大あわてで出発したのでしょう。主イエスの誕生以前の数世紀の間、ユダヤにいられなくなった人たちがエジプトに逃れ、そのためエジプトの都市にはどこにもユダヤ人が多数いたということですが、幼子イエスと家族はこのような難民や移民の一員となったのです。

ご存じの通り今日、難民や移民、外国人労働者の受け入れが世界的な問題になっており、日本も無縁ではありません。今後この日本の国土の上で、日本人と外国人が共に生きることは、好むと好まざるとに拘わらず、この国に生きる誰もがいないがしろに出来ない課題となっていますが、このことはかつて日本が軍靴で踏み<sup>ぐんか</sup>にじったアジアで、また世界の中で、日本がどうあるべきかということとも密接に関わる問題であると思います。

私はこういう話を聞きました。荒瀬牧彦さんという方が2004年にアフリカのガーナにある難民キャンプを訪ねた時のこと。説教を求められて日本について話し、その中で経済的な豊かさを得たもののストレスの多い閉塞した社会の中で、若者にも高齢者にも自殺が増加しているということに触れました。すると難民の人たちはその部分に、驚くほど強烈な反応を示したのです。「おれたちは明日をも知れぬ生活を過ごしているけど、死にたいなんて思わない!」。何人かの女性は泣きだしてしまいました。なぜそんなことが起こるのか理解できなかったのです。そして日本の友人のために祈ろうと、全員立ち上がり、長い間力を振りしぼるように祈ってくれたということです。

すべての難民や虐げられている人が皆こうだとは限らないし、日本にももちろん素晴らしいところがあります。ただここで、日本のために祈ってくれた人々がいたことを知って下さい。その中に主イエスがおられることを信じつつ……。

## 新シリーズ 『いま なぜ 大嘗祭か』を読みなおす (3)

Q3 「大嘗祭」はこれまではどのように行われてきたのですか。

A 最近「皇室の伝統」という表現で「大嘗祭」などが古代以来同じように受け継がれてきているかのように宣伝されていますが、実態はその時その時様々で、いま言われるような形が整ったのは明治時代のことでした。

明治天皇は即位式から二年余を経た一八七一年(明治四年)十一月十七日、東京・皇居内の吹上御苑で「大嘗祭」を行い、宗教面でも最高の存在であることを公に表明しました。その後「大日本帝国憲法」「皇室典範」(一八八九年)および「登極令」(一九〇九年)などによって国家と宗教とを結合し、政治支配者を宗教的に権威付け、国家神道体制を法的に整えました。しかし、それらの法令に基づいて天皇即位儀式が行われたのは、ただ二回だけでした(大正・昭和の即位の礼)。戦後一九四七年五月一日に、これまでの「皇室典範」と「皇室令」はすべて廃止されて、国民主権を定めた「日本国憲法」(一九四七年五月三日施行)、ならびに「皇室典範」(六月一日施行)が定められました。

政府は、一九八八年一月の国会答弁書以来「憲法の主旨に添い、皇室の伝統等を尊重し」と繰り返し言明しながら、現実には国民主権の憲法の枠を超えて、「皇室の伝統を重視する」名目の下に「登極令」にあるような儀礼を強行してきています。「大嘗祭」もこのような方向で強行する危険性があります。

### 質問1.

天皇は人間宣言をしたのではありませんか。

### 答え

天皇は、1946年1月に「新日本建設に関する詔書」(いわゆる人間宣言)を発表しました。そこでは「五箇条の御誓文」を引用して「広く会議を興し万機公論に決すべし」と口火を切って語りました。「広く会議を興し」は、明治においては公族の間で会議をしたのであって、一般庶民は除外されておりました。マッカーサーは、これは日本の民主主義を謳っていると喜んで世界に伝えたのですが、天皇は巧みに“言葉のあや”でかわしたのです。

さらにそこでは「天皇を以て現御神とする者に非ず」と言いながらも、皇室神道の天照大御神の祭儀行事を行う子孫であって、「朕は爾等国民と共にあり」と言っています。「朕」とは現神であり「爾」は神の裔ということで、この用語は天皇と臣民を指しております。「御名御璽」をもって印鑑署名している限り、決して人間宣言をしているのではありません。そして人間らしい真摯な悔い改めの言葉もありませんでした。

今日、宮中祭祀で最も重要とされているのは「大

嘗祭」で、天皇を神とする儀式です。毎年秋、宮中では「新嘗祭」が行われていますが、天皇はこれによって現人神となる権威を身に着けているのです。

現在の天皇・皇后は宮中祭祀に特に熱心であり、「祈る」天皇・皇后として敬愛を集め、天皇が仕える神々によって日本に平和と繁栄が与えられているかのように多くの日本人が信じ込まされています。しかしこの皇室神道は、普遍性を持たない自国中心主義に過ぎません。

### 質問2.

日本国憲法第一条に、天皇は「国民統合の象徴」とありますが、それとの関連はどうでしょうか。

### 答え

この第一条の『国民の統合』があたかも天皇の宮中祭祀信仰によって『国民を一体化する』ことを規定しているかのような疑いを人々に与えざるを得ません。そのために、それぞれ異なった宗教・思想・信条をもつ国民の多様性が生かされず、民主主義が育ちにくい構造になっております。新天皇の即位式により、まやかしの国民の一体化が演出されることを懸念しています。

(川越弘 沖縄伝道所牧師)

## 大嘗祭について考える

### 天皇・イネ・東北

小塩海平（東京告白教会長老、東京農業大学教授）

靖国神社が大村益次郎の提案により東京招魂社として建立されたのは、明治2年（1869年）のことであり、その目的は戊辰戦争で官軍として戦って死んだものを祀ることであった。岩崎孝志は『キリスト者の平和論・戦争論』（2009、いのちのことば社）の中で、次のように述べている。「無血革命といわれる明治維新ですが、戊辰戦争は日清戦争を上回る戦死者を出しただけでなく、それをさらに上回る非戦闘員が殺されました。しかも政府軍は、「賊軍」につながるすべての死者の遺体の放置をしばしば命じ、埋葬することさえ許しませんでした。それは、戦国の世にも例を見なかったものです。上野でも会津でも函館でも、あるいは咸臨丸のような船の上でも、敗れた側の犠牲者は、死臭を放つままに放置されました」。靖国問題の原点に、このように捨て置かれた大量の賊軍とその親族があったことは、ぜひとも記憶しておかねばならないことである。

原発事故を含む今日における東北の苦境の淵源は、この戊辰戦争にあるといっても過言ではないであろう。河西英通の『東北-つくられた異境』（中公新書、2001）によると、東北地方の人口増加は20世紀になるまでは全国平均並みであったが、度重なる大凶作と東京を中心とする国内の陸上交通網の発達により、北海道開拓、台湾経営、南満州の開発、韓国の扶植の後塵を拝することになり、「劣った東北」のイメージが定着することになったという。日本武尊、坂上田村麻呂、源頼義、源義家、源頼朝などによって波状的に繰り返されてきた東征は、戊辰戦争以降、天皇制と密接に結びついた東北地域への稲作の強要によって、極限に達したといえるのではないだろうか。

司馬遼太郎の『街道を行く（3）陸奥のみちほか』（2008年、朝日文庫）の解説に次のような記述がある。「東北が水稻農耕文化によって『開拓』されると、かつての豊饒の地は極度の困窮の地と変わり、東北における水田耕作のあらゆる矛盾が集約的な形でこの土地に現れてきた。…（略）…司馬氏はこれらの歴史を前提にして、ほとんど無念の情で歯ぎしりせんばかりに、なぜ『水田農業の権威を否定する』と宣言しなかったか、なぜ『弥

生式水田農業を神とする』呪縛から脱しなかったか、と繰り返し疑問を発している」。

『近代日本思想の一側面-ナショナリズム・農本主義』（1994年、八千代出版）を著した綱澤満昭は「稲作はいったい東北の地に何をもたらしたことになるのか。不可能を可能にするという稲作地拡大は、日本列島すべてを幸福にしたのであろうか。亜熱帯性の植物であるイネが、東北の地に本来適するはずがない。寒冷地であるという一点から考えても稲作が東北の地に不適であるなどということは十分すぎるほどわかっていたことである。わざわざ飢餓の歴史を重ねることがわかっていながら、この北国にあたかも稲作が唯一絶対のものであるかのように強要せしめたのは誰なのか。そしてそれはなにゆえなのか。…（略）…権力者が最も御しやすい対象は農民であった。それも弥生文化がもたらした水田農耕の民である。焼き畑農耕には漂泊性がついて回ったが、水田農耕には良田に仕上げる根気を必要とした。…（略）…王権は定着農耕を絶好の王化手段に選んだ。戸口に編入して定着させる。居住地からの離脱、つまり亡命逃散は、これを罪と見なし処罰する。これによって権力者は、否応なく農民からの年貢を吸収することができたのである」と考察している。宮沢賢治が「サムサノナツハオロオロアルキ」と詠んだのも、度重なる大凶作・大冷害によって疲弊の極みに達していた東北農村の姿にほかならない。

イザベラ・バードの『日本奥地紀行』（1880年）は、稲作に征服される前の米沢平野の様子を描写して「エデンの園」と賞賛し、「自力で栄えるこの豊沃な大地は、すべて、それを耕作している人々の所有するところのものである。彼らは、ブドウ、イチジク、ザクロの木の下に住み、圧迫のない自由な暮らしをしている。これは圧政に苦しむアジアでは珍しい現象である。…美しさ、勤勉、安楽さに満ちた魅惑的な地域である」と述べ、原始的な生活ではあるけれども、人々が豊かな暮らしをしていたことを注意深く書き残している。古来、この地域にはアイヌと共通の祖先を持つとされる蝦夷の民が、三内丸山遺跡に代表されるような豊かな縄文文化を展開していたと考えられており、柳田国男でさえ、東北地方

の地名は、7割近くがアイヌ語で解説できると述べている。佐々木高明の『照葉樹林文化とは何か』（中公新書、2007）や『稲作以前』（NHKブックス、1971）では、柳田国男らが主張している日本文化＝稲作文化という単一民族神話に対する批判がなされており、古代日本には東アジアに共通な照葉樹林文化が基底にあり、そこに稲作文化を含む複数の文化の波が繰り返し到達し、天皇一族もその一波としてやってきたのだということが示されている。

明治天皇が最初に東北巡幸を行ったのは明治9年のことで、当時は、天皇が誰で、どこに住んでいるのかを知らない民が東北にはたくさんいたようである。記録には「天子様」という記述が頻繁にみられ、「天皇」という言葉自体が普及していなかったことがよく分かる。その後、強力に皇民化が進められていくことになるのであるが、これが今日の皇室による被災地訪問の原型であろう。皇室による慰霊や慰問もその延長線上にあるのではないかと想像される。

要するに、一方で日本という国が「単一民族」

によって成り立つ「瑞穂の国」であり、天皇の支配のもとに結束してきた世界に類を見ない国家であるという幻想を作り上げ、他方で徴税・徴兵のための制度として、日清・日露戦争以降、東北の地に水田稲作が強要されていったのである。したがって東北の大凶作・大冷害は起こるべくして起こったものであり、天皇制の宿痼ともいえるべきものである。その結果、東北からの満洲移民が加速され、やがて数多の農民たちが戦場へと駆り立てられることになった。そしてこのシステムは、さらに大東亜共栄圏へと拡大・適用されていったのである（藤原辰史『稲の大東亜共栄圏』、2012年、歴史文化ライブラリー）。

今年行われることになっている大嘗祭は、稲作というシステムを用いて、天皇が今後もこの国を支配していくということの宣言にほかならない。この儀式は単なる宮中セレモニーなどではなく、歴史的現実としての呪わしい天皇制支配を象徴する儀式なのである。

## <ヤスクニ関連ニュース>

○ 大嘗祭に公費、差し止め却下 東京地裁、弁論開かず

天皇の代替わりに伴う「即位の礼」や皇室行事「大嘗祭（だいじょうさい）」に国が公費を支出するのは政教分離を定めた憲法に違反するとして、キリスト教の牧師や市民が差し止めを求めた訴訟で、東京地裁（朝倉佳秀裁判長）は一度も弁論を開かないまま、訴えを却下する判決を出した。支出により、信教の自由を侵害されたとして、慰謝料の支払いを求めた訴えの審理は続き、今月25日に第1回口頭弁論を開く。

判決は5日付。国費の支出について「国民が納税者としての権利で差し止め訴訟を起こすことを認めた法律はない」と指摘し、訴え自体が不合法と判断した。原告側は控訴する方針で、「国、政府の立場を追認し、議論を一切せずに前例を踏襲した不当な判決だ」という抗議声明を出した。

（朝日、2・13）

<編集後記>

ヤスクニ通信 769号が多くの教会で第二主日に間に合わなかったこと、また『いまなぜ大嘗祭か』を読みなおす(2)中、「登極令」であるべきところ、複数箇所「登極礼」となっており、お詫び致します。様々な意見やコメントに、すぐに応答できずにタイミングを逸してしまいがちだったため、ある牧師のアドバイスを受けて、フェイスブックを立ち上げてみました。<https://www.facebook.com/日本キリスト教会靖国神社問題フォーラム-2132841150269861/>にアクセスしてみてください。(K.K)

○ 「国民総参宮」の旗、伊勢市が撤去 政教分離違反と指摘

・・・市や伊勢商工会議所など官民でつくる「御大礼奉祝委員会」（会長・鈴木健一市長）が製作。計59本が駅前や市役所の前などに昨年末から掲げられた。旗には奉祝委員会の名前を書き入れておらず、「平成感謝 国民総参宮」の文字以外なかった。1月8日に一部報道機関から、神社への参拝を奨励するのぼり旗を市役所前に設置することについて「自治体の政教分離の原則に反するのではないか」などと指摘を受けた。このため、市は「憲法違反とは考えていないが、誤解を招きかねない表現との指摘を重く受け止める」とし、同日中に59本すべてを撤去した。・・・

（朝日、1・9）

報告：古賀

770号ヤスクニ通信 2019年3月10日

発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

発行人 古賀清敬、編集 小塩海平、発行 芳賀繁浩

(日本キリスト教会大会事務所)